

大学の景観・アメニティと滋賀大学

第12回地方財政学会が滋賀大学であり、はじめて訪れた。昨秋の日本環境会議も彦根であったが、その時は琵琶湖近くの滋賀県立大学で行われた1日目だけ参加した。滋賀県立大学は真新しいモダンな建物が並ぶ明るいキャンパスであり、歴史を感じさせる滋賀大学とは趣を異にしていた。



彦根駅からまっすぐ彦根城をめがけて進み、城の濠をぐるっと回ると大学の正門にたどりついた。ここには経済学部と本部などがあり、宮本憲一先生がこの7月まで学長をつとめている。小高い山に建つ彦根城に隣接して、美しい濠を借景にとりこみ、緑豊かな景観とアメニティにあふれるキャンパスに感心した。



2日目の朝早くキャンパスを訪れ散策したが、すがすがしさを感じたものだ。写真の濠の横に建っているのは、大正13年に建築されたもので、旧彦根高等商業学校時代からの伝統ある講堂である。建物の外観や色合いも、以前に本レポートでも紹介した旧松本高等学校の講堂、現在は「あがたの森」の講堂とよく似ている。同じ旧制高校として、共通するものがあるであろう。松高の講堂はヒマラヤ杉に囲まれているが、こちらは城の濠とうまく調和している。



学会初日の午後、歴史のある講堂で「持続可能な社会と地方財政」というテーマでシンポジウムが行われた。滋賀県知事や金沢市長、ニセコ町長などの報告があり、興味深い内容であったが、講堂の威厳に圧倒される感じであった。私も2日目午前の共通論題「公共投資と地方財政」でコメントをして、多くの知見を得たが、大学の景観とアメニティを考えさせられる学会であった。

さて、この4月に学部長最初の仕事として入学生に次のような挨拶をした。山の畑キャンパスは「古墳が二つもあり、緑も多く季節の移り変わりが実感できるコンパクトなキャンパスです。」現在、法人化に向けた中期計画作りに追われているが、キャンパスの景観とアメニティの充実についても、ぜひ盛り込んでいきたい。

(6月20日 記)